大正十三年五月三十日印刷 大正十三年六月一日發行（毎月一回一日發行）
大正十三年六月 日第三種郵便物認可

婦人と勞働

六月號

Vol.2.No.3 THE FUJIN TO RODO June, 1924


味がよい
きゝがよい
品質日本一
ヤマサ醤油
▼各地醤油店にあり
ヤマサ醤油と御指名を乞ふ
ヤマサ醤油
最上醤油
YAMASA SHIYOYU
宮内省御用達
千葉縣銚子町
濱口儀兵衛釀
『實に旨い……』と
舌皷うつお料理には必ず
味、香、色、ともに勝れた
ヤマサ醤油が使はれて
あります。
一升壜詰　少人數用
中樽（四升二合詰）
九升樽

婦人と勞働



第二卷第三號

涙と力

顧みよ、私たちの過去を！　日本の女性の過去を！

涙に打ちのめされて地上を這ひまわる、弱虫であり、あきらめさ、宿命觀と、奴隷の幸福に醉ふてゐた、女性の名の過去を顧みて私たちの感じる恥辱はどんなに深いか!!

私たちは私たちではなかつた。女性が女性ではなかつた。其の名は征服の快味に醉ふ、男性に都合のいい名であつた。私たちの總はどんなに永い間、かたい／＼束縛と、蔑弄と、重い／＼壓抑さの下積みに哭いて來たらう。

私たちの涙は、今こそ、私たちのために流すべきものであることを知る。すべての屈辱の涙で洗ひ濟めよ！心から哭いた後のほがらかな氣持となつて、私たちは先づ、光明を仰いでにつこりと笑はふ。私たちには、私たちの力があることを知る力の自覺ほど私たちを勇氣づけるものがあらうか！

力よ！・寸刻も、私たちと共にあれ！

婦人と勞働（六月號目次）



婦人の社會的要求とその發現（上）

青野季吉

一

婦人雜誌が大々な勢ひで賣れるといふことは、雜誌經營者などの誰でも口にするところである。雜誌の廣告などを見ても婦人雜誌ほど大袈裟なものはない。十萬廿萬といふ發行部數は婦人雜誌でなくては見られぬことで、小さな新聞などの比でない。その婦人雜誌の內容も二三年前までは隨分低級なものであつたが、此頃ては隨分程度の高いものが相當な賣行きを保つてゐるやうである。たとへば小說類などにしても、いい加減な翻案物などでは讀者を滿足させぬ所から、一流の作家の創作をならべ立てると云つた風で、創作家の方でも婦人雜誌ものと言つて馬鹿にせず、相當な努力の籠つたものを提供してゐると云つた風である。

かう云ふ具合で婦人雜誌が量に於いても急激に發展して行くし、質に於ても漸次に高まつて行くのは、何を意味してゐるだらうか？

云ふまでもない婦人の社會的興味が、非常な勢ひで高まつて行つてゐる實證である。いつたい婦人ばかりに限つたことはないが、社會的興味や社會的要求が高まつて行つた場合に、最初に先づそれが發現されるのは手つとり早く、生活の全般に大した動搖や不安を與へないで、その興味なり要求なりが充される方面であ

る、それは文字を通じて、他人の生活やその重なり合つた社會に觸れることである。男性の場合にしてもそうである。若い頃には主として書類や雜誌や讀書でその興味なり要求なりを滿して濟して置く。純粹な知識的興味でそうした世界へ耽ると云ふよりも、易きにつくと云つた意味でそこへ走るといふ場合の多いのは、事實の經驗が示してゐる通りである。

日本の近代婦人覺醒の歷史の一頁が、かの青踏社の人達によつて開かれたのも、その意味で自然なことである。いかにも文學的で、生活と大分離れた抽象的な人間性の主張といふ方が先に立つてゐたのは、やはり易きに付くと云つた心理、出來るだけ手つ取り早く、社會的興味なり社會的要求なりを滿たし度いと云つた心理が働いてゐたのである。

二

そう云ふ點で特に興味があると想はれるのは、婦人雜誌を披いて見ればすぐ分ることとてあるが、揃ひも揃つて讀者からの投書や文章を揭載してゐる事實である。甚だしいのになると全誌を擧げて讀者に提供してゐるのさへ見受けられる。そしてその讀者の文章なるものを讀んで見ると中々面白い。言ひ度いことを言つてゐる。狹い家庭や、物の分らない夫や兩親の前で云へぬことを言つたり訴へたりしてゐる。それて雜誌と云ふ『廣い』社會で言つたり訴へたりすれば、それで一應は胸がすくと云つた具合である。

それは婦人雜誌が他働的に、婦人の社會的興味なり要求なりを滿足させるばかりでなく、主働的な滿足の機關であるといふ證據であつて、婦人雜誌の急激な發展の一半の理由はそこに起るとも考へられる。自分の思つてゐることを自分の手で自分の文章て發表したいと云ふ自己表現欲は婦人——婦人ばかりではないが

——の社會的要求の最初の顯はれである。しかもそれはその要求の行動化の極く最初の顯はれで、その內左の心理的意味を考へて見ると、極めて重要なことである。

それならば何故そう云ふ手つ取り早い、易きに付く道り方を選んで、社會的興味なり要求なりを、滿足し又は表現するといふ道を擇ぶのであらうか。

それは元來人間は保守的なものであるといふところから來てゐる。特に保守的な、婦人の心理的習慣から來てゐるのである。もつとも元來人間は保守的なものであるとか、婦人は別けても保守的であるとか云ふことは絕對的な話ではない。人間をとりめぐつてゐる制度や社會の習慣が、いろんな關係や連絡で網の目のやうに細かになつてゐて、容易にそれは破れるものでない、よしその一角を個人の力で個人の關する範圍で、强いて切り破つて見たところで、それに對する反動なり、壓力なりが餘りに强いので、結局個人々々は保守的な力の方へ多く引き摺られるのは自然な成行て、その結果總じて人間は保守的なものとなつて居り、若しくは保守的なものとされるのである。

特に今日までの文明は男性支配の文明であつて、男性に對する社會的保守力のそうした壓力よりは、女性に對する壓力の方が幾倍も强かつたので、特に女性は保守的だと云はれる所以である——こゝにはそうした社會的制裁の方面と、それに對する個人の打勝ち難い點とを指摘したが、凡ての人間別けても女性が保守的となるにはいろんな事柄が作用してゐる。例へば家庭敎育とか學校敎育とかいつたものも、要するに出來上つた社會的制度や慣習には絕對に隨ふ可きものだと、いろんな口實を設けて敎へ込むことに努める。詰まり保守的に、服從的に、從順に、內氣に、おとなしくすることに努める。その敎育の結果、社會的制度や慣習

をまるで運命のやうに考へ込んで仕舞つて、それどうしやうとも考へぬやうな保守的な人間が出來上るのである。

三

そうした保守的な外側の力を破らせる力に二つある。一つは强い戀愛であり、他は社會的生活の自然の變化である。

戀は盲目であると言はれてゐる。封建時代のやうな峻嚴な不自由社會でも、例へば近松の作物などに顯れてゐるやうに、戀の力は社會の制約を全然無視した行爲をさせる。封建時代の悲劇はたいていそれである。强い戀の前に立つては、制度も習慣もあつたものでない。その代りにそうした個人的破壞の後は、社會的の制度や慣習の變革ではなくて、個人の死である。心中である。戀は死なりとの名高い言葉があるが、全くその通りである。

この結果から見ても分る通りに、同じ破壞の力であつても、戀愛と、モウ一つの社會的生活の自然の變化とは、まるで性質が異ふものである。制度や慣習を破るといふ點では、多少は似て居るし、またこの二つ以外には、それを破り得るものはないが、その性質はまるで變つてゐる。

戀愛の方は盲目的にまで高調した强い人間性の顯れが、當然その結果を齎らすだけであつて、制度や慣習を破壞するといふ點から見ると、狂人が制度や慣習を無視して振舞ふのとちつとも變りはない。その狂人を瘋狂院に送つて仕舞ふとか、その梅川忠兵衛乃至はロメオとジユリエツトが、心中してしまふか水の中へでも潜り込んで仕舞へばそれでお仕舞ひである。制度や慣習の力はびくともしない。詰まり戀愛は戀する男女

をして、その前に制度や慣習を無視さるといふに過ぎない。本統に制度や慣習の力を破らせるものは、社會的生活の自然の變化である。その代りにこの方は、戀愛のやうに個人的、ヒステリー的なやり方ではない。極めて徐々で、社會的である。

前段に婦人雜誌の例を持つて來て、婦人の社會的興味なり要求なりが強くなつて來たこと、それが文字を通じてと云ふ安易な、手つ取り早い方法で滿足されてゐることを說いたが、それならば、そうした婦人の社會的興味なり要求なりが何故强くなつたか。そこへ立ち戻つて考へて見る。

四

前號で平林君も說いてゐたと思ふが、今日の婦人の生活はよほど社會的となつてゐる。決して昔のやうな深窓の生活でもなければ、親や夫の奴隷の生活ではない。早い話が婦人の勞働者とか、職業婦人とか云ふものゝ存在を見ればよい。婦人勞働者や職業婦人の勞働は、最早や家を出て社會的となつてゐる。それも好きこのんでと云ふわけではない。今日の社會狀態や暮し向きの都合から云ふと、親は娘を十分喰はせたり着せたりすることは出來なくなつた。そこで娘は職業婦人となつて人並な生活をしなければならぬ。夫は自分の賃銀だけで一家を支へて行くことは出來ない。そこで妻や娘を工場へもやらなければならぬし、電話局へも通はせなければならない。それは勞働社會のことであるが、婦人の生活上の活動が次第に社會的となつてゐることはそれで見ても分る。

上、中流の婦人にしてもそうである。今日は最早その生活は純家庭的ではない。社會との接觸面が多くなり、家の中へ社會が侵入して行つてゐる。何々婦人會とか何々婦人事業と云つたものは、その現はれの一つ

であつて、そうした婦人の生活が漸次に社會的になつてゐることは、いろんな方面に顯はれてゐる。
婦人の生活がそんな具合に社會一になつて行く原因は、種々雜多である。先きの勞働社會の場合では、生活上の必要が重な原因を爲してゐる。つまり今日の經濟組織は婦人を家から追ひ出してしまはねばならぬやうになつてゐる。上中流の婦人の場合では今日の文化の持つの諸機關が、彼女等を家庭から連れ出すのである。例へば娯樂の機關や、交通の機關などにしても、家庭的團欒的なものではなくなつて、社會的なものとなつてゐる。それが彼女等へ肉體的心理的に作用して、その生活の基調を漸次に社會的の方へ引摺つて來ると云つた具合である。また學校教育などにしてもそれにあづかつて力のあることは、誰でも氣のつくことである。

かうして婦人の生活が社會的になつたことは、婦人をしてますます社會的接觸を深くさせる所以であつて社會的興味なり要求なりがその中から自然に心理的に高まつて來るのである。

しかしそれなら心理的にさうして高まつて來た社會的興味なり要求なりが、何の障害もなしに滿足されるかと云ふにそうは行かない。生活の方は社會的になつて行くが、制度や慣習はさう容易に變るものでない。變るには變るが、變り方が極めてのろくさいのである。ところで制度や慣習が甘く當てるやうに變つてくれなければ、十分に徹底的に、社會的興味や要求なりが滿足されものではない。そこで手つ取り早く、易きに付く方法で、制度や慣習に大して觸れもせず、その中に閉ぢ籠もられてゐる大半の生活に大した動搖も來さなければ不安も齎らさない方法で、それを滿足させる機關が必要となつて來る。婦人雜誌などがその代表的なものなのである。（次號へつゞく）

英國の婦人勞働組合運動（上）

奥むめお

わが國には未だ、婦人の勞働組合として取り立てゝ云ふほどのものは一つもない。その量に於ても質に於ても、わが國で第一位を占めてゐると云はれてゐる日本勞働總同盟さへ、若干の婦人組合員を有するだけで今年の第十三回の大會婦人部設置が問題になつたとき、その準備のためになほ一ケ年の猶裕を置くといふことになつたと傳へられてゐる現狀である。これまでとて、婦人勞働者の（廣い意味で職業をもつすべての婦人）組合が、たとへば事務員、女敎師、タイピスト、看護婦、女工等の組合が作られやうとした事もあるし作られたこともあつたのではあるが、その多くは、政府又は資本家が先きに立つて作らせた所謂天下り式のものであつたために、又、餘程自發的に初められたらしいと思はれたものでも、その背後に幾人かのおせつかい者がゐて操つてゐるものであつたりしたために、どれもこれも組合の當初の目的を忘却して、自然消滅の運命に終つてしまつたやうである。どんな運動でも、その人たち自身の意志から出た自發的のものでない限り、おせつかいや、附燒刃や、道樂半分で、なし遂げられる筈がない。況してこれまで長い間、二重にも三重にも屈從的地位に押こめられてゐた婦人の運動である。餘程しつかりした意氣込みて初めるのでなくては六ケしい。

曾つて、英國のリーヅ勞働者協會の理事フォード女史は、婦人の組合運動の難かしい所以を述べて次のやうに云つた。『婦人の組合組織に關與した經驗のある者なら誰でも一樣に感ずることであらうが、その骨折、その苦痛は一通りや二通りではない』併し、私の信ずる所に依れば、その原因は女子にばかりあるのではない。本當に組合主義を信奉する女子は、男子よりも一層組合に對して熱心、且つ忠實である。たゞ女子の敎へは從來『從順』こればかりであつた。婦人參政權、が拒まれる限り、政治上でも女子は永遠に從順を强要せられて無知の境涯に置かれなければならないであらう、今の社會はあらゆる方面に無知に女子の犧牲を要求してやまないのである。』

二十五年の今日、この言葉は、ぴつたりわが國の社會事情にあてはまるものである。

由來英國は、組合運動の祖國と稱せられてゐるが然し、婦人の間にこ組の合運動の機運が動いて來たのはさう古いことではない。十八世紀は云ふまでもなく、十九世紀の初め頃にもなほその運動はみられなかつた僅かに、一八一一年、愛蘭のロックバローでレース編みの女達主動者となつて、賃銀値上げを强要するために團結して、盛んに集會を開き、近傍の町々へ一味の者を派遣して組合加入を勸誘し、又資金を募つて、一時大いに世の中を騷がせたと傳へられてゐる位のものである。

どこの國の歷史に就いてみても同じであるやうに、英國の婦人勞働者もまた、その組合運動の初期には、同じ勞働階級の中の男子組合の壓迫や排擠に對して多くの犧牲を拂はなければならなかつた。新しい機械が發明せられて勞働が單純化するに伴つて、今まで男子ばかりに獨占せられてゐた職業範圍に、女子も幼年者

も歡迎せられるやうになつてから、女子や幼年者は、男子勞働者から『不當なる競爭』(やすい賃銀、長い勞働時間にも甘んじて傭はれる女子や幼年者は、傭主にとつては非常に重寶なものであるだけに、男子勞働者にとつては恐るべき競爭者である)として常に排斥せられて來た。一八四九年エヂンバラに女子印刷工組合が設立せられたが、男子の印刷工組合との間にいつも面白くない感情がわだかまつてゐた。後、女子印刷工が激増するに從つて、男子組合は徐々反對し妨害した。一八一八年の紡績工罷業の際には、女子も男子の組合員と同額の罷業手當をうけてゐたけれ共、女子組合員は傭主のために罷業破りに利用されて、組合としては大失敗を招いたので、紡績組合は『裏切者』の女子を除外することに決め、それ以來ずつと女子の前にその門戸を門鎖して來たとのふ事も傳へられてゐる。

一八七七年の勞働組合大會のとき、綿工組合から提出した女子と就業時間の制限を目的とした工場法案は女子の組合代表者に依つて猛烈に反對せられた。次いで一八八二年に勞働組合大會の總會委員たる下院議員ブロードハースト氏が、ブラックカウントリー金屬工組合を示唆して、十四歲以下の女子が鍛冶工として就業することを禁止しやうとする法案を議會に提出したが、これも又女子組合の反對をうけ、兩者の間の論爭は數年に及んだ。坑夫聯合會が四四五〇人の女坑夫を坑內作業から排除するために、一八八五年に炭坑調整法の制定を促進しやうとした運動も、女子組合のために阻止せられた。この間に於ける當時の女子組合の主張は次のやうなものであつた。

『われらは女子たるの故を以て、勞働時間や職業上に立法的制限を加へやうとすることには絕對に反對する。何故ならば、それは女子と保護といふこれを表面の名目とするけれ共、時間や職業上の制限は、結局女子の

賃銀を低下し、益々男子との釣合を失はせる結果となるものである。女子も男子と同等の時間、同等の職業に就き、且つこれに對して同等の賃銀を確保せられなければならない。それがためには、一に團結の力に依るより外に手段はない。男子組合は徒らに女子を排斥することをやめて、須く女子の組合運動を助成すべきである』云々。

然し、一八八六年から一八九六年までの十年間に、總ての勞働組合を通じて女子の組合員が一七〇〇〇から一一八〇〇〇に增加し、更に一九〇六年には一六七〇〇〇のなつた。この激增は、男子の組合が女子の加入を是認して、女子の組合運動のために力を注ぐやうになつてからのことである。勿論、印刷、製本、紡績、陶器、金屬等の各職業に於ての女子に對する男子の反感と排斥とは、なほ却々猛烈ではあつたが、一般織物工組合、靴工組合、被服工組合、鑛夫組合、その他多くの男子組合が、女子の加入に意を注ぐやうになつた事は、實にこの頃からの事である。この外その頃設立せられた二つの組合の內、黑上衣組合（事務員、書記等の組合）は、その職業の性質上男女の間に職業の爭奪が少く、男子組合も未ださう發達してゐなかつたために特に女子を排斥する理由なく、又一般勞働組合は、その組合員の中に各職業、各産業に就事する半熟練不熟練の雜多な勞働者を包含してゐるために、特に女子だけをとりたてゝ差別扱ひをする必要がなかつたから、この二組合は初めから男女の組合員を併有し、從つて兩性間に於ける排擠もなかつた。その當時女子の運動の中堅となつて活躍したのは、女子勞働組合協會であるが、協會は、たゞに男子組合の開放を享受し、これを歡迎したばかりでなく、更に進んで、男子組合と提携するために積極的に努めた。一八八九年には、女子

（十九頁へつゞく）

婦人の職業について

速水久子

私の魂は今輝やかしい春の光りのそれの如く、未來への限り無き憧憬、高き理想、新しき抱負、若々しき希望、そうした積極的なるものゝ喜びに、無限に躍動して居る。

私達女性の前途には、今解決すべき幾多の問題が存在して居る事を痛感する時、私はいつも一人の强き女性として永遠に向つて私自身を正しく生かす道を考へずには居られない。此處では只其の中の一問題たる婦人の職業に就てのみ述べる事とする。

近來婦人の職業問題が切りに私達女性の先覺者達に依つて論ぜらるゝに至つたのは、當然の事にもせよ、とにかく私達にとつて喜ぶべき現象と云はねばならない。

私達は必らず個性と人格の獨立とを有したる一人の意志ある人間として生きなければならない。かく自覺ある人間が相寄り相集つて相互扶助の下に營む社會生活に於ては、當然その個人性による各人の自由の世界が認められなければならない。生活は各自の自由意志によるものにして、他人のこれを律すべき權利はあり得ない。絶對なるものゝ前には私達は皆平等である。

私達は男女を問はず一面に於てはかく社會生活を營む者なるが故に、當然社會の爲に働くべく運命づけられて居る。それは人間として當然の義務であり、

又權利である。私達は進んで社會の爲に人類の爲に努力する意志の强い人程深く尊敬する事が出來る。かゝる人達のみを以て形づくられる社會を眞に合理的な理想的な社會として、未來に向つて私は豫想して居る。そうして之に反したる社會は不健全なる社會として否定する。

此處に於て未來を望む眼を轉じて過去の世界を振り返る時、私の眼に映ずるものは何であらうか？それはあまりに力弱く淺い女性の足跡である。男性のそれに比して女性の殘した文化の貧弱さ!!私には殆んど認められない。然らば女性の文化創造といふ尊い仕事を妨げたものは何か？私は斷言する。それは餘りに家庭にばかり引込んで居て、大切な社會生活を忘れて居た結果であると。かく社會の思潮を觀察する事を忘れて居た爲、のばすべき生命ものびず、汲むべき知識の泉も等閑となり、遂に今日に至つて女大學式な頭の所有者から女性の惱力を疑はるゝ破目に陷つたのではなかつたか？

然らば何故に彼等が社會生活に沒交渉な境遇に甘んじなければならなかつたか？短く言へば何故家庭以外の仕事に對する自由が得られなかつたか？

言ふまでもない。過去の女性に獨立性の缺けて居た點に歸する。一個の人間としての自覺の缺けて居た爲である。自己の住むべき世界を持たなかつた爲である。それ故その生活は勢ひ男子に對して奴隷的とならざるを得なかつた。男子を離れて一日として生活の安定の得られない以上、やはり生を願ふ弱い人間の常として、自己の意志を曲げても妥協の生活を爲し、寄生々活に甘んじて安價な意義なき生活を餘儀なくされねばならなかつたのである。その結果女性の人格は無視せられ、男性の附屬物として物質視さるゝに至り、遂に『無力者』といふ變な代名詞が出來上つてしまつたのである。その上肝心の女性までこの劣等觀念に支配されて別に反感も懷かず、

安價な運命論者の如く過して來たのである。

何といふ不合理な社會!! 私は絶對に人格の獨立を叫ぶが故に、かゝる不合理な不平等な社會を極力否定する。そうしてこの不快な概念の打破を叫ぶ。と同時にもつと男女協力して働く社會の實現せん事を切に望まずには居られない。

それには先づ一般女性の頭の中から劣等觀念を取去る事である。即ち男子と對等の腦力所有者たる事を強く自覺すべきである。一個の人格ある人間たる事を知るべきである。此處に於てより完全に自覺を持つ爲に、すべての女性が家庭の仕事以外に各自の能力に應じて職業を持つ事が必要になつて來る。一般の婦人が何れの道にもせよ、各自心血を注ぐべき仕事を持つて生産經濟に携はるならば、人間の最も恐るべき倦怠を感ずる暇もなく、愉快な大きな期待をいだいて日々の生活を價値あらしめる事が出來るのではないかと私は思ふ。その上かく社會に出でゝ經濟の獨立を得る事により、人としての人格も大いに磨かれ、自覺も完全に得らるゝのではなからうかと私は確信する。

私は限りなく婦人の社會生活を高唱する。

然し或る一部のブルヂョア婦人の如く、全然家庭を無現して社會に飛び出せといふのではない。彼等には享樂的氣分が濃厚で殆んど努力しようといふ樣な眞劍さが無い。頭から人生を享樂しようと考へて居る人に對して好感を持つ事は私には到底出來ない私は自分の生活に眞劍さを缺いた人は尊尊する氣しなれない。寧ろ人生を苦しみ飽くまで努力する人に對して懷かしみを感じる事が出事る。

家庭は共同生活を營む根據地である。一日の勞働に勞れた精神を慰め、新しき力の蘇生をはかる上に於て絶對の意義を有する。

私の尊敬する與謝野晶子氏が言つて居る。

『私は家庭を愛する。然し家庭を以て私の生活の全

部だとは思はない』と。私は限りなく之に同感する。

何時までも寄生々活をいゝ事にして、父母や夫の働いて得た金を費す事にのみ無上の興味を感じて居るやうな閑人は、今後の社會には生くべき價値のない無用の人間となるだらう。私達の永遠の友となり得る者は、眞劍に自己の生命を愛し、之をより良く生かす爲に未來に向つて絶えざる努力をなしつゝ、自己の世界を追求して行く人のみに限られねばならない。

思へば私達の爲すべき仕事、爲したき仕事は餘りに多い。之に比して限られたる人間の生命はあまりに短かい。私達は出來るだけ家庭生活を簡易にして無駄な時間を省き、社會に出でて自己の世界を建設しよう。

多くの抱負と希望とを懷いて、明るい日の下に働かう。

いつまでも消費者としてのみ生きる事は斷然やめなければならぬ。そうして積極的に知識の泉を汲みながら、より高き價値の創造に努力するのが、進み行く人類の當然の道ではあるまいか？

眞の價値高い文化は、かく健全なる男女協力の努力によつてのみ完全に創造され建設さるべきであると私は強く斷言してはゞからないのである。

職業婦人の部類か？

紅燈の下、三味の音、舞扇のきらめき……そのやうな享樂の社會に生きてゐる藝舞妓などは果して職業婦人と言ひ得るか如何うか？彼女等の生活が、努力の提供に依つて、報酬を得てゐるといふそのことが、正當な意味のものでないといふ質狀の下にある。性の提供が、物質的價値であることが、殆ど公然の事質として容認されてゐる社會の缺陷を、婦人の經濟的獨立をもつて職業婦人の立場と考へる私たちは、深く〳〵考究する必要があると思ふ。

羞かまぬペン先

翠川秋子

□

さなきだに短かい花の命が、今年はまたゝくひまもない程、眞盛りを、雨と風とでみるかげもなく散らしてしまつた。それは恰度、戀を戀する處女の胸に、惡魔が呪の征矢をはなつたのと同じやうに!!!

□

よるとさはると埴原大使とか、ヒユーズ氏とか、大分問題は紛糾してゐるが、そんぢよそこらの選擧熱に浮かされてござる御大方は、一向に御高見をおはきにならない、却つて、女子青年會あたりが、鬪議して、米學生團にむかつて、檄を飛ばさうとしてゐる。

□

ウィンの新聞紙に『美人の塑像青年を殺す』といふ見出しで、珍聞がかゝれてあつた。さうだどうした事かと讀んで見ると、これは有名な、オーストリーの彫刻家の手になつた、蠟の塑像で、髪結ひの廣告に用ゐられてゐた。處がこれを見たある感傷的な青年が、で叮嚀に三八迄も、こんな實在の美人には、とても邂逅し得ないと悲觀し、煩悶の結果自殺したのださうな、正に文字通り悩殺してしまつた。果して事實であると

したら、彼等の精神について研究する必要がありはしまいか。

□

大分近頃になつて、職業婦人といふことに、うす〳〵理解らしい、態度をとつて見せる人が出て來た、あへて、らしい。とか、見せるとか、いふのは、まだ本當に理解してくれないからである。電車中なんぞで、きくともなしに、人の噂をきいてゐると、婦人の職業に反對してゐる人が十中六人迄はある。

□

この間、私の社の社長が私にいふのに、『何某君は男で幾何しか俸給をとつてゐない、よくあれでやつていけると思ふ』そこで私は、『それなら、あれ位よく働く人ですもの昇給させてお上げになれば？――』といつたら、『然し外とのふり合もあるから』それはやむを得ないかもしれぬ、然し又、『女とちがつて男は、妻子を養はなければならないから、なか〳〵責任があるし、負擔が重い』こゝに於て私は憤慨した、それは私の責任の重いことを社長は知つてゐて、いつたからである。我儘で通つてゐる私は、正しい論をたゝかはす場合には、社長も小使も同じことである。『妻子を養ふ責任があるから、あの位では、可哀相だと仰有るが、あの方の家庭は奥さんと子供が一人ぎり、よその間借りをしてゐられるのですもの、大してかゝりはしますまい私等を引合ひに出すことは、何ですか、私の家庭を少しお察しになつたら如何です、老母と子供が三人、とても間借しする人達の家には、置いてくれられないやうな男の子、やむを得ず、一軒の家に住まはなければならないのです。五人の生活、然も子供は三人共學校にやつてゐます。――男であるから、女であるからといふ、その負擔の輕重がどうちがひますか、それを、男に對してはさも、その薄給を氣の毒に感じられて、

女は如何にその苦を痛切に味はつて居ても、猶且つ努力についても、同じ以上の、朝八時半から、夜七時、おそい場合は十時迄も、夜業してゐる時がありませう。それでも女は生活し得られない程の、薄給に甘んじなくてはならないでせうか』、私は例の通りの調子でかういつた。社長をはじめ、癪に障つたやうな顔をして、例のひややかな凄い目で、ギロリと見てゐたが、終りに、『よく分つてゐる、君のやうなのは婦人としても例外だ、よく知りぬいてゐるから、さう憤慨するものではない』でも私は婦人全體の爲めに、なか〳〵氣持がおさまらなかつた。

□

丸の內、田舍の人達が新聞などで見たり、人の噂ばなしに聞いたりした、東京の丸の內は、たしかに、憧憬の地であること疑ひない。又、現に、その中で活動してゐる男も女もが、便利な點について、正に一等地たることに相違ないが、雨の一週間位も降らない時ときたら、みじめなもの、一等地は砂漠と變じて、吹きまくる風に、砂のつぶては容赦もなく、眼といはず、口といはず、打ちつけ、一間先さへ見ることの出來ない程の濛々たる砂塵、とても滿足な格好は保たれない。日本の服裝の婦人達は、見るからにみじめな、裾は風のあほるにまかせて臑もあらはに、被ひのない日本の髮はよもぎのやうに亂れ、美の表現されるべき個所は樂にしたくもな。これが、都會の中心、田舍人の憧憬のまとゝなつてゐる所なのかと、うたゝ感慨無量である。

□

洋裝は、ブルジョア階級に限られてゐると、誤解してゐる人が大分ある。一見すると非常に華美に見える

が、それは色彩とか、形とかが、從來の日本の風俗を破つてゐるから、ちよつとそんな感じもするが、—それはある一部分の人達は、たしかに不生產的な服裝に、浮身をやつしてゐることは事實であるが—ほんたうに職業のために働いて行かねばならない婦人は、服裝を改良する必要がある。それも高價な仕立代や、布代を投じて、作るのでは何にもならぬ、有合せたもの、早い話が、日本服のもう使へなくなつたやうな品、それを切つたゝりつないだりして、自分の身體に、合ふやうなものを作りさへすれば、造作なく出來るし、却つて專問家が、型にとらはれて作つたものよりか、自分の個性を表した、面白いものが出來上る、改善された服裝はたしかに能率の上ることと請合ひである。

□

（十二頁よりツヾク）

の組合員を有してゐる大小の組合に對して、協會に加するやう勸說し、特にその醵金は女子組合員一人につき一ヶ年に半片といふ破格の小額を決め、協會からは女子幹部を派して、いろ〳〵な便宜を講ぜしめた。また、協會は顧問委員會を設けて、男子の組合から優秀な役員を招聘して、勞働組合政策に就いて種々忠言を聞く機會を作つた。これらの結果として、女子の組合はます〳〵健質な發達をとげ、男子組合との提携も次第に成巧して行つたのである。

同一階級に屬する男女が、共同の敵たる資本家の前で競爭するほど不得策なことはない。共にその地位をひき下げられて、全勞働階級が一層みぢめな立場に陷るだけである。

女教員に對しての物足らなさ

——その他——

爲藤五郎

明治三十三四年頃、私どもの小學生時代には、私の郷里の郡にはたゞ二人の女教師しかなかつた。當時私どもの眼には、そのことが——女が學校の先生になるといふこと——非常な驚異であり、同時に、その二人の女の先生はたぐひ稀れな偉人てあるかのやうに見えたのであつた。それが、大正五六年頃には、帝國教育會かの決議では、女教員の數を教員數の半分までは増加してもよいといふことを表示するに至つた。(當時、私は『女教師果して可なるか』といふ論文を或る雜誌に發表して、男教師に遙か劣ることを列擧したことを覺えてゐるが)ところが、眼の前に迫つて居る全國女教員大會では、女教師をして校長その他學校職員の幹部に任用することに就ての討議が行はれることになつてゐるやうてある。私どもが新教育運動の機關として、また實驗所として最近設營して居る『兒童の村』小學校に於ては、校長主事を置かないと同時に、教員間に於ける性的差別待遇の如きも全然取らうとしてゐる。

そこには、時間にして僅かに二十何年かの距離し

かないが、社會の狀態も案外に變化するものだ。それは、婦人がそれ程働かなくてはならぬやうに、世の中が所謂世智辛くなつたのであると思ふ人もあるだらう。婦人の地位がそれ程高まつたのだと見る人もあるであらう。

×

『年老いし女教師一人下車すれば、汽車は搖ぎぬ山間の驛』これは歌人ならぬ私が、或る時實見實感を記したものである。女教師といふ言葉に對しては、私は直ちに或る寂しさを覺える。そして、この寂しい感じは、褪せた色と、燻んだ色とで彩られてゐることを普通とする。

×

『女教師となる前に先づ婦人たれ』と私は論じたことがある。しかし、それは女教師自身の罪ではない女子教育者、就中女子師範教育者の罪である。その女子師範教育者の中でも、わけて生徒と最も多く接觸する舍監の罪である。そして、それはやがて多くの舍監を生むところの女子高等師範教育の罪である事實、現在の女子高等師範學校の空氣は餘りに硬化して居る。固定し切つてゐる。

或る縣から上京した女生徒の修學旅行の團體を案内して、私が淺草の活動寫眞を見に行つたとき、その引率の女の先生は、活動寫眞に這入つたことがないと言つて、一切の手續を知らなかつた。今の教育は、それほど民衆とかけ放れた、雲上人を育てるやうな貴族的教育を施されてゐるのである。

×

しかし、私が女教員に對して、その色の褪せた、若くば燻んだ色に包まれてゐることを不滿に思ふのは、美的對象としての男の玩弄物になれといふのでは勿論ない。生活態度それ自身に潑剌としたところ

のないことを難ずるのである。思想的にその日暮してあることを寂しく思ふ意味てある。

×

獨り女教員と限らない。現代の教育者全體が、著しく人間意識、社會意識、階級意識に盲目てあり、無感覺てあることは事實だが、女教員に於ては、殊にそれが甚だしい。今日の女教員の人で、社會現象に注意してゐる人が何人あるであらうか。讀書をして居る人が何割あるだらうか。たまに文字に親しむものがあると思へば、それは大抵安價な感激に醉つてゐる程度のもので、所謂有島物か倉田物を讀んで誇つてゐる位ではあるまいか。そして、先生といふ言葉の上のみを辷つてゐる尊敬を與へられる代償にその一切の不滿をも不平をも、壓制をも暴虐をも、ただ隱忍といふ『美德』の倉庫の中に、藏ひ込んで了つて居る現狀ではないだらうか。

×

しかし、私はそれをしも女教師それ自身の罪のみとは考へない。今日の樣な日本の生活習慣、生活組織の中にあつては、女教師は普通の筋肉勞働者以上の勞務を强ひられつゝある。(男教員とて相似たりであるが)學校に於ける筋肉、精神の相貫的勞働、それに家庭に於ける主婦としての負擔、恐らく私は、職業婦人として女教師程負擔重くそして責任重き、位置に置かれてあるものは、純勞働者を除いては、餘り他に例があるまいかと思ふ。

今日の女教員の過半數は大抵共稼ぎである。

×

私にも共稼の經驗はある。冷飯を食ふこと、家庭の中を疲勞し切つた空氣によつて占領させること、流産子供の營養不良、それ等が共稼の生活に何よりの獲物である。

私の妻は、過勞のために卒倒したことがあつた。

×

それでも、女教師諸君は『女なるが故に』從順であり、隱忍である。

曾て、東京の女教師諸君が、某新聞で誣報された萬引問題のために憤起されたことがある。それ際は恐らく東京に於ける教員の集會として珍らしい程の緊張した空氣であつたであらう。文字通り眥を決して憤慨するの權幕であつた。私はその席にちよつと傍聽に言つて賴母しいことだと思つた。

しかし、その『體面のため』『教育の權威のため』の憤慨と同程度のものが、それ自身社の會生活に向けられて、或は現實社會の諸相に向けられて發せられたならば、私はそれに對して數倍の賴母しさを感ずるであらうと、私かに考へながら歸つて來たのであつた。

×

數ヶ月前、某大都會の女教員會の主催で、一つの盛んな會が開かれて、私ども同志三人は招かれて一場の講演をした。その會は表面はただ總會であつたが、事實は無理解なる市當局者の教育削減案に對する示威行動であつたのだつた。

私どもは、これまでにない賴母しさを覺えない譯に行かなかつた。

英國の女巡查制

英國政府は今度女巡查制度を設けようといふ目的で、その調查委員といふやうなものを任命した、委員長はボールドウィン內閣の內務大臣ブリッヂマン氏である。

教師の正しき位置

平田のぶ

若き人々が笈を負うて遙々と慕ひ寄るほどの偉大な人物を中心として出來た家塾、或は一郷の信仰の的教化の中心である御師匠さんをめぐつて作られた寺小屋、それ等も維新と共に廢れて、校舍の尨大、收容人員の多數を誇る學校といふ工場に變りました。それは家庭工業が大仕掛の工場に變つたと同じ理由からで、最少限度の資本で、最大限度の製品を作り出す爲めてあります。

こは教育の正しき制度とは思へません。

此處では教師は技術者であります。彼等はその技術を資本家たる社會に賣附けて生活して居ります。かうした關係に於ては、資本家は常に或る强みを持ち、彼等を監督し支配するの位置に立ちます。

こは教育者の正しき位置とは思へません。

然し彼等には、彼の名人氣質と同樣に『教育は神聖なる天職』との誇を持つて居りました。然しその生活が漸次おびやかされ誇では腹の充ちぬ事に氣附き更に教師とは愚物の代名詞の如く思はるゝに至つては、外的强制的な附燒刄の誇も捨てなくてはならなくなりました。然も彼等は既に轉職の道さへ斷たれてゐました。何の自覺も誇も、興味もなく止むを得ず生活の爲めに教職に就いて居ります。こは教育者の正しき生活とは云へません。

此工場に於て行はるゝ教育的効果の測定は、如何

に多くの知識を蓄へ如何に多くの技能を收得したかと凡て、量的に測られます。測定し得ないより深き質的方面――味ひ、香ひ、感じの如き――は全然顧みられません。こは敎育概念の誤りを裏書きするものであります。

この工場に於ける敎師は技術者だといひました。それは資本家に對してのみならず、子供に對しても同樣であります。短き時間、少なき努力によつて、如何に多くの兒童に多くの事柄を敎え込まふかに腐心して居ります。然し又時には、經驗といふ資本に依て生ずする資本家であり、敎權を振廻する無慈悲な貴族でもあります。こは社會と敎育者と被敎育者の正しき關係とは思へません。

かくの如き多くの正しからざる事の原因の大半は或は制度の罪に歸すべきものかも知れません。然し私共が制度を革め得る迄敎育を中止する事を決心しない以上、更に、制度をも超越する愛の偉力を信ずる以上、現在のまゝの制度に於ても、猶よりよく生くる道を見出す事を考へなくてはなりません。

敎育の目的は、文化財の傳道ではなく文化の創造であります。然して愛の中にのみ創造は生れます眞善美を愛し、憧れ求めてこそ初めて、探求し實行せんとの希願も起るのだと思ひます。

更に敎育は人格と人格との交涉であります。彼我人格の全一てあります。混合でなく化合であります。然して化合も全一も愛といふ熱の力を俟たなくてはなりません。

敎育の作用は注入でなく、觸發であり、强制でなく自由活動であります。お互のよき暗示は此作用を助長させます。然も暗示の唯一の通路は愛であります。

機械的活動の中に愛はありません。憧れはありません。從つて精進はありません。支配者と被支配者と特權者と無特權者、完成者と無完成者、その間にも眞の愛は存在しません。

その時どき

前田河咲子

やうやくにわが子はあるきはじめけりつつじ咲く庭に靴の跡たえず

雑司ケ谷の夕べしづけくほのぼのと蕾のつつじ白くぞ見ゆる

みち足らふこころいだきつつつじ咲く庭にわが子とともに遊ぶも

母の腕に子は寝入りけりからたちの芽ばえにそそぐまひろまの雨

庭の草わが採り居れば子もともに草むしりする春の朝かな

乗りすてし玩具の馬に櫻ばなちるまひろなり子は寝いりつつ

通俗經濟講話

化粧品は何故高い

鈴木茂三郎

一

化粧品のどれもが贅澤品だと云へるかどうか。米國で奢侈税を決めるときに、これが問題にされたのであつたが、日本てはどうだらうか。私がモスクワで見た婦人は、おしろひをなすつては居なかつた。生地そのまゝである。誰れもがさうだとなると、誰れもなすりたくは無いものと見えるが、そのうち一人でもなすつたとすれば、おしろひは贅澤品に違ひない。しかし白人は自然の白さを白くするために、おしろひを塗り、黑人は自然の黑さを黑くするために黑い塗料をなするとすれば、日本の婦人は自然の黃色を黃いろくする爲めに、お黃ろひを塗らねばならない理窟ではあるが、おしろひをなすることが、生活の一部であるほどに必要化されたおしろひは、化粧品のうちでも贅澤品だとは、强辯出來ないかも知れない。

物の本によると、徳川三代家光の姫君のお輿入れに、化粧料銀三千五百枚、米一萬五千石の目錄が千代田城から擔ぎ出されたとある。大した化粧料だが近頃の持參金、結納の金一封などは、昔の化粧料が

現代化したのではあるまいかと思ふ。ともかく昔に於ては贅澤品であつたことは疑れらい。

おしろひが贅澤品であるか、それとも必需品であるかは、日本に於てはあまり重大ではない。何故なら高くても贅澤品でも賣れさへすれば好い。と云ふ經濟組織の仕組みが資本家本位に出來てゐるからであるが、これがロシアのやうに社會本位の仕組みになると、一方に着る着物の無い婦人があれば、なするおしろひよりも、着る着物をつくる爲めに、生産の主力を傾けねばならないから、そこではじめて化粧品が贅澤品であるや否やの問題が重大となり、日本と同じ仕組みの米國に於て問題にされたことは、それに奢侈税をかけて出來るだけ多く婦人の、なすり賃から税金を捲きあげようとの魂膽に出でたものである。

二

賣れさへすれば好い。これが資本家本位の現代經

濟組織の心髓に食ひ込んだ精神である。それは化粧品の一つ〳〵にまで溶け込んでゐる。私はかつて郡山の紡績工場を視察した事があるが、女工さんの手洗場には洗濯石鹼よりも粗末な、アルカリの强い石鹼が置かれてあつた。しかし多くの工場には石鹼などは置いて無い。安く買へるならどの工場にも職工のために石鹼をそなへるであらふに、それだのに大正十一年の化粧用石鹼の輸出高は百六十五萬斤、これを金額にして百七十四萬圓に及んでゐる。と云ふ其のことは社會の必要などは、どうあらふとも、一文でも高く賣れさへすれば好い、此の精神の現れである。

かうした醜い資本家本位の精神を、猿の呀の如くあらはに世間へむき出すものは、化粧品に對する莫大なる廣告費の濫費である。『石鹼の消費量はその國の文明の程度に正比例する』などと、學者を買收して格言を吐かせた獨逸の石鹼屋があつたが、花王石

輪一とつを買へば、汽車の窓に自然の風光を害ねつゝある廣告塔の廣告費の一部が私たちの負擔となる。これは米國の話てはあるが、紐育て一年に濫費する廣告費は六億二千五百萬弗に達する。

そのうち贅澤物の廣告は一億五千萬弗て、アムステルダムの金剛石、セイロンの眞珠、フランスの首飾り、支那の硬玉などが、幅を利かせてゐる。化粧品の一千七百五十萬弗はアメリカにしては少な過ぎる。日本に於てはどの位ひになるか正確な數字は無いが、玄人筋の觀測によると總計年五千萬圓、主としては廣告術の幼稚なために新聞、雜誌の紙面に濫費されてゐるが、これが毎月三百六十萬圓と豫想される。つひてのことに一とつ二たつの新聞を引き合ひにすると、報知新聞社の收入は昨年までは廣告收入四割五分、新聞販賣收入五割五分であつたが、近頃は半々である、優秀な新聞ほど廣告收入は販賣收入の壘を磨するの狀態にある。昨年上半期(六ヶ月)の全收入を見ると、毎日七百七十六萬圓、朝日八百五十二萬圓、時事二百八十七萬圓であるから、これを半々とすれば三社の半年の廣告收入九百五十七萬圓となる。大したものだ。更らに此で玄人筋の觀測に戻ると、化粧品の廣告料はひどく安いから全廣告料の三割五分にあたる。つまり玄人筋の觀測にして誤りなく年額五千萬圓とすれば、一千七百五十萬圓(しかし事實はこれほどではあるまい)は化粧品に對する廣告料の濫費となり、そとは賣れさへすれば好い、彼の自由競爭の不秩序なる生産になる驚くべき犧牲的の濫費と云はざるを得ない。

三

東京のY新聞に超弩級艦と稱せられた、警察犬見たいな經濟記者が居た。二、三年前に此の超弩級艦は突如社から馘られたのである。

それが超弩級艦てあつただけに、馘首された原因が分らなかつた。本人も頰を膨らせて首をかしげた

のである。ところが近頃になつて漸つと原因が探明された。それは斯うである。當時賣り出しの或る化粧品の生產費を紙面に素破抜ひた。と驚ひたのは化粧品製造の資本家て、廣告主たるの權威を笠に着て早速魔手をＹ新聞に延ばしたのてある。かくて超弩級艦はもろくも沈沒したのだつた。

此の實例によつて明白なとほり、化粧品の生產費は不明白にすべくひた隱しにかくされてある。私はこの通俗講話を書くために、警察犬見たいに肝膽を碎ひたのであるが、軍縮で爆沈される老朽艦三笠の私には、明白につかむことは出來なかつた。けれ共化粧品のどれにしても原料は略ぼ似たものてあるから、大體の見積りは出來る。ベルッ水などは苛性加里二、酒精一〇〇、グリセリン一〇〇、蒸溜水二〇〇（單位グラム）に香料のラベンダル油を一滴落とせば約二合出來るが五、六錢で足りる。一箱廿八錢もする一と握りの粉白粉は亞鉛華五〇滑石五〇炭麻々ンサンマグソシウム四〇を突き混ぜて香料を落させば、それで二〇倍も出來て、五十錢を出でない。香料と云つてもローズ油かイリス油かバニリンが普通用ひられ、人工のものは高くない。いづれにしても自分で造つて見ることだ。安おしろひの鹽基性炭酸鉛の鉛毒におかされる心配もなく、それが如何に安く製造されてゐるかと云ふ、化粧品生產コストの不明確が從つて明確になる。製法もむつかしくない。參考のために東京高工應用化學科の處方を二たつ示して置く。

化粧水製法

安息香丁幾	二〇
グリセリン	五〇
アルコール	六〇
硼砂	五
カゼイン	一、
トラガカンダ	二、

クリーム

扁挑油	一〇〇〇、
白蠟	一三〇
鯨蠟	一三〇
グリセリン	二五〇
香料	｜｜

サリチール酸 〇、二
石鹸末 一、
香料 ―

四

地震の二三日前に届いたイングランド銀行の發行する雜誌によると、日本に於ける贅澤品の輸入高が近年驚くばかりに增加しつゝあることを指摘してゐる。そして其の結果は恐るべきものがあるてあらふと喝破したのであるが、二三日後に恐るべき地震に見舞はれたなどは皮肉だつた。ダイヤモンド毛皮、貴金屬の裝身具が多いと云ふから、私たちには緣は無いが、化粧品の輸入は原料並に石鹸をも加えて二百萬圓を下るまい。內地の生産はどの位ひあるか、之れは一層はつきりとしない。多くは染料、藥品その他を兼ねて製造してゐるからである。ちと古いが大正九年の化粧品の製造會社と販賣店(何れも染料塗粧を含む)の狀態をしるしてみる。(單位千圓)

	製造會社	販賣店
株式會社、社數	九八	六三、
拂込資本金	二七、〇一一	六、一〇四
積立金	一、二一八	二六九、
合資合名社數	一〇〇	二五〇
拂込資本金	三、三三七	七、六九五
積立金	六八九	三九三

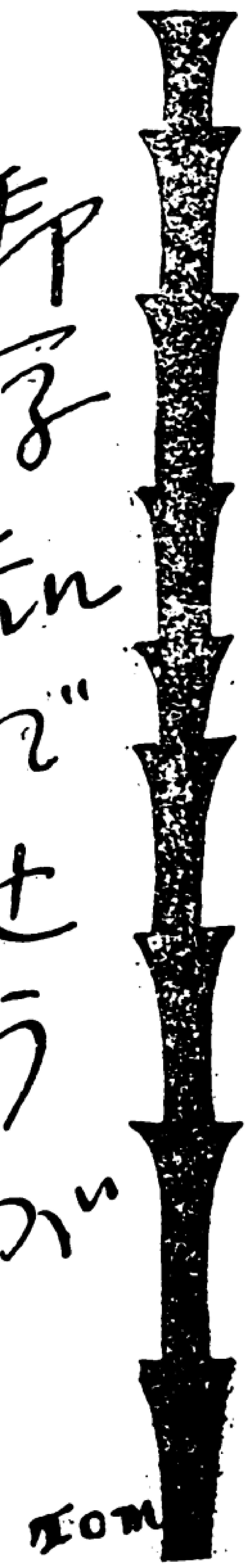
此のうちの一會社の決算報告書を基礎としてそこで製造された商品(主に粉白粉)の市場價格の內譯をしてみると概算ではあるがこんなことになる。

粉白粉一箱の値段廿八錢

內、五、〇厘	容器
三、五	原料代
六、〇	廣告費
一、〇	營業費
二、五	工賃
六、〇	製造家利益

(三十四頁へつゞく)

御存知でせうが



護憲派の勝利の意義

一

五月十日の總選擧は壓倒的大多數を以て護憲三派の勝利に歸した。解散前第一黨であつた政友本黨が極端な選擧干涉の下に、僅々百餘を得たに反し、憲政會は悠々四十の差を以て第一黨となり、政友會また本黨と第二黨を爭ふに至つた。敵も味方も事の意外に驚かざるを得なかつた。しかし徒らに舌を捲く者は、社會の政治的進化を解せざる者であり、民衆の政治的自覺を信せざるものである。

日本の社會は久しく封建思想に囚はれてゐた。政治的には事大思想となつて現はれ、政府の味方にさへなれば强いもの偉いものと思ひ、お上の仰せはすべて御無理御尤もとせられ、大臣樣は天皇陛下の次ぎ位に尊いお方だと思はれてゐた。歷代の政府はこの心理を利用して總選擧に臨んだため、從來の政府與黨は大抵候補者の六割六分を當選せしめてゐた。所が今度の總選擧のでは政府與黨（政友本黨）の當選率僅かに四割四分を出でず、候補者の總數より見れば漸く一割を超ゆるに過ぎない。これは國民の間に封建思想——事大思想が破れて來た一徴候であつて、政治的には明かに一つの進歩である。勿論一月以來有力な新聞が筆を揃へて『護憲運動』を助成したことも多大の影響を與へたであらう。しかし斯樣な運動が効を奏したのも、從來盲目的に政府に從つてゐた者が、多少とも自分の判斷で、護憲の一票を投じたこと——そのこそ自身が一つの進歩ではないか。現に政府與黨の總務山本氏は『新聞の宣傳によつて純眞な選擧人の良心が曇らされた』から政府側は敗けたのだと怨んでゐる。なるほど政府にとつては國民の『純眞な良心』とは『奴隷の如き屈從的な精神』を指すのであらう。たま〳〵此奴隷が自覺して多少とも自主的に

なつたのは、吾々から見れば一つの進歩に相違ないのである。

二

更に護憲派が勝利を得たことは日本の政治が一歩前進し、新らしい時代に這入つたことを意味する。『護憲』の合言葉は今まで色々な意味に悪用されて來た。それは單に一つの政黨が反對黨を誹謗するために利用されることが多かつた。しかし今度の『護憲』は本來の意味の護憲であつた。即ち貴族政治、封建政治、獨斷政治に對する、民衆政治、立憲政治、政黨政治の抗議であり、宣揚であつた。護憲派の勝利に依て、國民は（不完全ながらも）明かに、民衆の生活に基礎を置かざる政治を否認したのである。政黨は（殊に從來の）貴族に比して曲りなりにも民衆の（一部ではあるが）意志を代表してゐる。貴族、官僚に至つては民衆との間に何等の内的關係もない。國民が斯かる貴族の政府を捨てゝ、政黨に立脚する政府を選んだのは、確かに一つの進歩である。勿より現今の政黨はブルヂョアジーの代表者である。その上に立脚する政府が無産階級のよき味方であらうとは思はれぬ。しかしそれは完全なる民衆の政府へ一歩接近したものである。それはプロレタリアに取つて、貴族政府よりは確かに有利な政治である。

三

現今の社會は階級對立の社會であり、政黨は階級の利害を代表するものである。このことは政治が進化するに從つて益々判然となつて來る、護憲派が勝つて貴族階級の勢力が減殺された後では、地主財閥、商工資本家等の利害を代表する政黨が現はれるに違ひない。そして今まで一つに固つてゐた『護憲派』は、地主の利害を代表する農村黨、商工資本の利害を代表する商工黨中産階級を代表する急進黨等に分裂し、政治は益々露骨に階級の利害を反映するに至るだらう。この政治上の階級對立は、無産階級の自覺と結集とを促進せずば止まないのである。國家のためだとか、社會奉仕だとかと云ふ言葉は魔力を失つて、無産階級はハッキリと自分の利害と立場とを自覺するに違ひない。

全く清浦内閣が恐れてゐた樣に、護憲運動は階級の戰ひであつた。それは貴族とブルヂョアと云ふ二つの階級を對立せしめた。

しかし坂を轉がる石は、中途で止まらないで、轉がる所まで轉がつて行く。階級利害を携げて貴族を倒した護憲派は、更に新たに階級の對立を促進せざるを得ない。無產階級が歷史的使命を擔つて政治の舞臺に現はれるのはその時である。

無產政黨の準備

普通選擧の實施は當然無產政黨出現を促進させねばやまぬ。現に『政治研究會』といふ無產政黨の準備團體が生れんとしてゐる。その綱領には當然、徹底的普通選擧の獲得がかゝげられるであらう。徹底的の內容は、いふまでもなく婦人參政權を含まねばならぬ、そしてその婦人參政權の獲得は無產婦人が極力主張して、政治研究會が政黨の出現にまで進んだ場合、すゝんで走せ參ずべきである。

（三十一頁よりつゞく）

四、〇　小賣屋利得

容器と原料は別とするも、勞働者の勞働力によつてつくられた白粉が、生產着の女工には二錢五厘の涙ほどしか與へられて居らないのに、これをなするのに六錢の廣告費がいる。六錢の利得をするほど强慾な資本家と、四錢をせしめる小賣屋がある。これだから白壁のやうに塗り立てたなら、私たちの家族などは乾干になる。化粧した人間の乾物など感心出來ない。それ故に私どもの生活にとつては、事實おしろひは奢澤品たらざるを得ない。それは資本家本位の不秩序なる生產組織のつゞく限り、どうすることも出來ない呪はしき暗影である。

附記、『此の通俗講話は各號とも、前後の連絡はありません。集めた材料によつて、適宜な問題を取扱ひます。

カフエー夜話

——女給さんたちのひそ〳〵話——

一、「やつと靜になつたわね

二、「さうね、すつかり疲れちやつた

三、「睡くなつちやつた最う何時かしら？

四、「最う十一時半よ

一、「また電車に遅れちやたいへんよ

二、「だつて、まだほら、その一組が歸らないんでせう、じれつたいわ

三、「あれは文士ですつて

四、「うそよ小說家

一、「まアそんなことはどうでもいゝわ

二、「今日いくらあつたかしら、

三、「なアに　チップ？

四、「さうねえ　いくらかしら？　いそがしいわりにしみつたれな客ばかりね

二、「常連がいけないわ、妙にしつつこくつて長尻でチップがなくつて！

一、「私たちは何といつても職業婦人でせう、やつぱりお金のためにこんなことをしてゐるのだからね、さうでせう……。

二、「こんなことをしてゐておしまへにどうなるんでせう。私が死んだとて誰泣きやせぬ「山の烏が泣くばかりね……流れ〳〵てどうなるかわからないわ。

三、「女給をしてゐると、世間ではみんな墮落してゐるように思ふでせう。

二、「經濟的獨立のためにやつてゐることもね

三、「思ふやうなお嫁の口もないしね

四、「どうして、世の中からこんなに輕蔑されるんでせう？

三、「私たちが弱いからよ

二、「タイピストの組合が出來たつていふわ

一、「私たちも組合でもつくつて、世の中の男を驚かしてやりませうか

二、「だつて皆無智だから駄目よ

一、「それがなんとかならないものか知ら？

二、「でも、私たちの力では出來ないわ

三、「女つて弱いものね

四、「そんなに悲觀したものでもないわ

一、「さうね、女だつていろんなことが出來てよ、男にもまけないやうなことが出來るわそれア出來てよ、きつと出來てよ、

二、「私駄目だと思ふわ……それよりも、理想的の結婚をした方がよかアなくつて

三、「理想的の結婚なんて今の世の中では出來ないわ

一、「やつぱり、私たちは私たちで立つことね、

一、四、「讃成……。

（終り）

お斷り

編輯の都合上、『法律顧問』と『世界の婦人』を次號に廻す事に致しました。筆者及讀者におわびいたします。

小兒の泣聲

——ブラウニング夫人——

彼等は蒼白き瘠せたる顏を擧げて天を望む
彼等の容貌は見るも怖ろし
彼等はいと高き所に彼等を守護せんとする天使のあるを汝に知らせんとて
大御神の居給ふ方へと彼等の目を注ぐなり
彼等は叫べり『何時までかォー殘酷なる國民よ汝は小兒の生命を犧牲にして世界の進步を圖らんために存在し
武器にて固めたる足をもて其の吸呼を止め殺氣に充ちたる途を經て汝の王位に進まんとするや
わが赤き血は跳ね上がれりォー金錢を種み貯ふる者よ
汝の紫の昭は汝の行くべき途を示せり
されど靜かに歔欷する小兒の聲は
勇者の怒りに憂くて痛く汝を阻ふなり』

南紀伊より

奥むめお

一日二十四時間の暮しやうにも屈託するほど呑氣な時間と、あり餘る金子とを持合せての旅ならば格別、あれからこれ、これからあれへと、つぎ次ぎに盡きぬほどの仕事を脊負つての田舍暮しは、さうのんびりしたものでもなかつた。

　雪の面うす紫に立つけむり煙の中に萠ゆる春かな

火鉢の中に山盛りにした炭火がくづれる度に寒さが一入加はるかと思はれた嚴冬の頃、杏坊の父ちやんは、流れの音や雲のかたちに旣に爭はれぬ春の色をみて、かう歌つたのに、今ははや、夏到來の聲に散る花のすがたもあはたゞしげである。

　斯うして、南紀井に於ける半歲の閑居は移つて行つた。電車の響きや自動車の唸りが、今、もう私の耳許に聞えてゐる。暫く振りで會ふ誰れ彼れの聲や表情やは、ひとつ〳〵にみななつかしく、思ひ出しては、ひとりでに口のあたりがむづ〳〵する程嬉しさが先廻りしてこみ上げて來る。

　わたしも留守中、私たちの仕事の上に投げかけられた知る知らぬ多くの先輩諸氏の好意と力添へとは私を喜ばせた。東京からの便りは、いゝたよりも惡いたよりもみな、私を元氣づけてくれるばかりてあつた。東京を立つ前に、公けの用事とわたくしの用事とがこんがらがつて非常に多忙であつたその中から、漸くの思ひで纒め上げて來た壹月號の編輯と

その費用とがいろんな事情に出會してみんな無駄になつたといふ知らせは、中でも一番つらかつたが、その代り在京の同志が、私よりももつと困難な事情の下で――或人は通勤の職務のあいま〳〵に、或人は學校に通ひ乍ら、又ある人は失職者の不安に慄え乍ら、仕事のために奔走してゐるといふ手紙は、かうして愚圖々々してゐるのが勿體なくてたまらないほど、私をいら〳〵させ活氣づけた。今、ペンを走らせてゐるこの原稿が活字になつて製本屋に廻される頃には、私も東京の土を踏んでゐる事であらう。半歲後の私は、舊に三倍し四倍した意氣込みを以て、事務所の古机により乍ら誰れ彼れと話合つてゐるにちがいない。暫く山を見、川を見みることにのみ慣れて來た眼を轉じて、再び都會のあの雜沓へ活氣と、徽渉と、憂欝と、不安と、反抗と、廢頽とそして慾と、色と、陷穽と……のあの混亂のまつ只中へ戻らう。

東京なら今頃は、小金井や向島あたり花見酒にでも醉つて浮かれやうといふ頃である。こゝ新宮の春は淋しい。花のたよりも聞かず、門前の全龍寺から散つて來る花びらが、朝も、晝も、晩も、雪のやうにちら〳〵するばかりである。

東京の動搖めきを、新聞と手紙の上に辛うじて想像するにすぎない今の身の上では、所謂流行婦人雜誌の廣告は、特に眼をひき心を索くことが非常に多い。私はひまのあるに任せて、成べくそれらに眼を通すやうに努めて來た。

四月號が、どれもこれも申合せたやうに婦人職業の手引に力瘤を入れてゐたのは、特に私のやうな立場に在るものにとつて興味深いことであつた。つい二三年前まで、陽春四月といへば、花見衣裳か嫁入の話で持切りであつたのに、何といふ、世の變りや

うであらうか。雲の上、上流社會の令夫人や令孃かゞみの載るところとばかり思つてゐたそれらの婦人雜誌の寫眞畫報の頁に、女車掌、タイピスト、女給から、女工、莚織りに至るまでの所謂『職業婦人』の寫眞が滿載されてゐるのである。而も、何と幸福さうな職業婦人たちであらう。氣の早いものなら『職業婦人萬歲』と叫び出しさうであるほど、それほどそれらの職業婦人の姿は、みな、流行雜誌の口繪に相應はしいまでに、落付拂つて、享樂的で、誇りかである。そこには、世に喧しい職業婦人問題などは、藥にしたくも見あたらない！

いつも乍ら婦人雜誌を讀んで何よりも一番に感ずることは、經營者が婦人の弱點を摑まへる事に最も巧みであることである。それに依つて婦人の弱點は益々助長せられ、資本家のふところはます／＼膨れてゆく。賣らん哉主義のそれらの婦人雜誌に取扱はれてある婦人職業の問題は、たゞ、齒の浮くやうな戀愛物や、安價な自己滿足にすぎない告白物やに代えて、時節柄やかましい職業婦人ものを持つて來たにすぎないのである。

花滿開の春の面白さを外にして、今日も明日も職業探しに、あてもなくさ迷ひ歩かねばならない求職者のたよりなさ、よし、何かの職業にありついたとしても、その收入で自分一人を養ふにもかたく、稼ぎ乍らなほあすの米代に途法にくれなければならぬといふ今どきの職業婦人の慘めさなどは、さういふ婦人雜誌の供給者の眼に入る筈もないこと乍ら、又、さういふ雜誌が飛ぶやうに婦人の間に賣れてゆく限りは、解決さるべくもない問題ではあるまいか。

我國の婦人問題、わけて婦人勞働問題の解決のために、利害を等しくする全ての職業婦人が、一致團決しやうとしてゐる時に際して、店頭のこの現象はまた一つの刺戟でないこともない。

紙鐵砲

『婦人の解放は要するに臺所の解放にある』と誰やらが主張なさいましたつけ。ほんとうにいゝお考へですわね。家庭勞働者の主婦への福音には違いないでせうよ。だけど私達のやうに、糧を得るために其日その日を慘めに送つてゐる無産者の家庭には出來ない相談なのは判り切つた事ですわ。文化的生活改善の宣傳に耳を傾ける暇さへもないのが無産婦人ですもの。何事も文化的に！凡てを文化式に聞いて呆されるではありませんか？文化生活といふものは社會の一部分の人たちにのみ許されてゐるのでせうかしら!!社會の一般の人たちに平等に惠まれ與へられてこそ始めて文化といはれるのではないでせうかしら!!私たち無産者には文化生活どころか、せめて人間らしい生活でも出來たら……と思はずにはいられません。（一主婦より）

『いゝ子だこと。さあ今度はあの歌を歌つて頂だい』

『いや〳〵このお菓子頂だい』

『すゞめの歌を歌つたらお菓子をあげますよお利こうさんね』

　無理强ひにさせられた子供は歌ひ終つてお菓子を食べてゐる。まはりにゐる大きな大人達は口を揃へて、可愛いゝお上手だこと！と連ぱつしてゐる。そしてその子供のお母さんの顔は自己滿足のよろこびでいゝ氣になりすましてゐる。親の自慢用具にされた子供、社交の道具にされた子供こそみじめなものだ。今日のいはゆる、文化婦人とか云ふ時代にめさめたハイカラなお母さんを持つた子供のめい惑さよ。（みき子）

　私の學校はミッションだけに、よく宗教の押し賣りがありますの今日は××教會から、明日は宗教團體の×會からと。賣手の手段―お說敎をお知らせしませう。『人間は科學を征服した。ランプは電燈に、わら小屋は大建築物に、乘物は飛行機となつて宇宙をも征服する樣に物質的文明になつた。その科學を征服した力は神が人間に與へた信念の力である。信念の働らきは何と偉大であらう。それ故偉

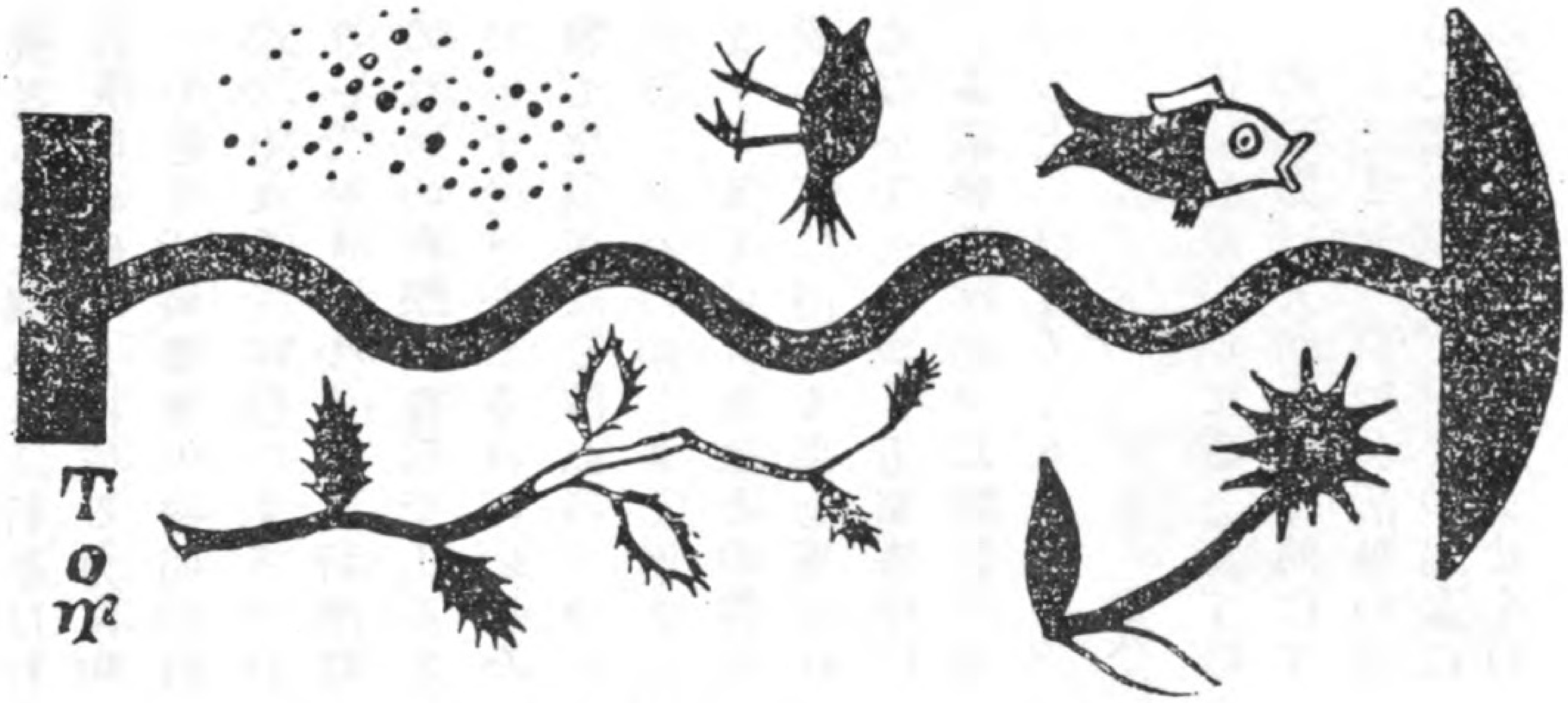
大なる神に頼れ』と。科學はたしかに人間の働らきに依る力に相違ないでせう。科學者の發明の目的は必ずしも自分本位であるとはいへないでせう。少くとも科學は人類のための科學の發明であるといへないでせうか　それだのに今の社會では科學は贅澤品の一つとして小數の人々の樂しさを增さしてゐます。凡ての人類はその偉大な科學の恩惠に浴する事を拒まれてはゐないでせうか？五里霧中にさまよふ宗教は結局、人間をマスイさせるといひ度くなりますわ。

（久代）

近頃私は痛切に感じますの。現代の家庭は人間を奴隷的にするといふことを。自由な活動の場所を持たない家庭ドレイの婦人に進化のありやう筈がありませんわ。親權さへ父權と母權では雲泥の差があるんですもの。全くの奴隷ですわ。笑つてもならない、大聲も出してはいけない、濶歩してもならないしといつた有樣ですわ。飽くまで男子本位に出來上つてゐる社會に婦人の社會的位置の向上の期待は裏切られました。皆さん！女性が太平の夢を見る時代はもはやすぎ去りました。時代の推移は婦人の團結の力を要求してゐます。女性よ！立ちませう。姉妹方のために、いゝえ人類のために！

良人よ、わたしを愛してくれる良人よ、何故わたしが女事務員にでもなつて貴郎の生活をおたすけしようとするのにこばまれるのです

何故、あくまでもわたしをお人形さんとしてかざりものにしようとしてゐるのです。何故、わたしを家庭から出して下さらないのです。良人の愛さへあればそれでいゝと貴郎はおつしやるのですか。わたしには、貴郎の愛が、ほんたうであるかどうか、疑はれてなりません。朝から晩まで、會社から貴郎のお歸りをまつために、わたしはどんなに一日たいくつな思ひをすることでせう。みんな世間の人達は汗みどろになつて働いてゐるのに、おめかしばかりで一日々々をたいくつにすごすのは世間の人樣に心でどんなに恥られることでせう。家庭はわたしにとつて獄屋のなかです。そして貴郎は、わたしの生活を保證するといふ口實で、御自分の放縦な生活をわたしに是認させようとするぢやありませんか。しかも强制的に――どうぞ妾を解放して下さい。（或る妻）



未來

——フランスのお噺から——

相馬泰三

あるところに、ひとりの若者がありました。その若者は堀立小屋同様な家に住み、ぼろ〳〵の着物をまとひ、たべるものもろく〳〵たべずに、ただ、ひた稼ぎに稼ぎました。そして、專心にお金をためました。花が咲いても、日が照つても、——世の中にどんな事があらうとも、そんなことには見向きをしやうともしません。可愛らしい顔をした若いおかみさんには、そんなふうにして味もそつけもなく月日がたつてゆくのが、何だか勿體ないやうな、また淋しいやうな氣がしてなりませんでした。しかし、それも、ほんの初めのうちだけで、しまひには、出してみるたんびに多くなつてゐる袋の中のお金の勘定をするのが何よりの樂しみになるやうになりました。

若者は、時々、思ひ出したやうにそれをざく／＼いはせながら、おかみさんに云ひ聽かせるやうに、

『これは未來のためだ、一文だつて粗末にしてはならない。』

こんなふうに云ふのでありました。

『それでは、つまり、未來のものを預つてゐるやうなものなんですね。』

『まあ、云つてみれば、そんなやうなものだ。』

お金はいつか一つの袋にはいり切らなくなりました。そこで、おかみさんは新しく、もう一つの袋を用意しました。が、やがて、それにも一ぱいになり、そして、第三の袋がつくられなければなりませんでした。

しかし、若者夫婦は、相變らず堀立小屋同樣な家に住み、ぼろ／＼の着物をまとひ、食べるものもろく／＼食べずに、ただ、ひた稼ぎに稼ぎました。そして、花が咲いても、月が照つても、――世の中にどんな事があらうとも、そんなことには一切見向きもしないで、專心にお金をためました。

さて、ある日のことであります、おかみさんが家で何か忙しさうに仕事をしてゐるところで、一人の乞食がやつて來ました。そして、丁寧におじぎをして、

『どうぞ、一文頂かして下さい。』と、願ひました。

おかみさんは、自分の着てゐるぼろ／＼の着物や、堀立小屋同樣な家の中を見まわしたあとで、

『お氣の毒だが、家は貧乏て、何もあげるものはないよ。』と、ことわりました。

『いいえ、隱したつてだめですよ。よそで聞いてきたんですが、ここの家には、お金の一ぱいはいつた袋が三つもあるといふぢやありませんか。』

『あ、あれかい。あれはね、私たちが未來のためにとつてあるんだよ。』

『え？　未來ですつて？』

『あ、さうだよ。つまり、未來のものを預つてゐるやうなものなのさ。』

『ところて、この私が、その未來なんですよ。』

『おや！お前さんが未來なの？それでは仕方がない。さあ〳〵、あがつて、ほしいだけ持つて行くといゝわ。』

乞食は遠慮をしないで、箪笥の中に藏つてあつたお金の袋を三つとも取つて、『ありがたう！』とも云はずに、さつさと出て行つてしまひました。

その晩、へと〳〵に疲れて仕事から戻つて來た若者がそのはなしを聽かされてどんな顏をしたか、どんなことを云つたか、そして、どんな騷ぎが持ちあがつたか、それは神樣のほかに誰も知つてゐるものはありません。（おしまひ）

女工と小女

今野賢三

五月の空はうるみを持つて晴れわたり、やわらかな朝の光りを孕んでゐる。

――こゝがおもり場でございますよ。

フサちやんの母は腰を屈めるやうにかしこまつて、黄色い顔をあげながら入口からなかを指さすやうにして私に教へる。

裏門から、廣場をすぎて、フサちやんの母が子供のおもり場といふところをふと仰いだ私は、左りの板戸の上に(物置場)といふ小さなフダが打ちつけられてあるのを見て、變な氣持になつて、入口からなかをのぞいて見てなるほど託兒所のやうなものだな……とすぐにうなづかれたものゝ、(物置場)のフダには何とも言へない皮肉を感じて了ふ。

なかの板の間に、乳呑兒を抱えた中年の女が十人ばかりゐて、そのまわりを五つ六つの男女の子供がうろ〳〵かけまわつたり、なにか母の眼をぬすんでこそ〳〵いたづらをしたりしてゐる。きたない鼻汁をすゝりあげる子供、眼のフチがあかくたゞれてゐる子供……など二三人が私を眼がけてものめづらしさうに近寄つてくる。

その母たちのひからびた菜つ葉のやうな、黄ばんだ、つやのない、蒼い顔には、やつと此の世につながつてるんだといつたやうな、生きることの疲れと、生氣なさが、あきらかに見てとられる。

牛の吼えるやう氣笛がながく尾をひいて鳴り出すと、朝の休みの知らせに應じて若い女工さんたちが三々

伍々あちこちから出て來て、私の前を通つてゆく。

私に放つ視線になんの若々しいかゞやきもない。十人のうちに一人ぐらゐしか、娘らしいはなやかさが見られない。

かたわらでフミちやんの母が私に囁く。

——このなかにゐるお母さんたちは、みんな旦那さまをなくした人ばかりですよ。こんな年になつても、女工してせめて子供を育てるより仕方がないんですから……。

——て、一日はたらいて幾らになるてせう？……。

——まアさうですね、一日七拾錢ぐらゐですね。

——それで子供を育てゝ生活してゆかれるかなア……。

私は思はず溜息を吐くやうに言つて足下を見つめる。

ふと見ると、すぐ右側の廣場でしきりにおしめを乾かしてゐる四十ぐらゐの女工がゐる。默々とうごく身體が朝のやわらかな光りに溶けてゐる。

——かうして子供をたゞ預かつてくれるやうなもの〻、一ヶ月に一圓以上も、それ、事務員の方へつけとゞけをしないと、……なか〳〵よくしてくれないのてね……。

フサちやんの母は、かう言つて、小さな眼の底でなにかより以上の意味を囁くやうにする。

私はその短かい言葉から、いろ〳〵なものを汲みとりながら、さうした中年の女たちの不幸な生活を考へて見る。

切つても血の出ないやうなしなびた此の中年の女工たちの顔！此のなかに健全なものが一人てもゐるか知ら！。

——私のフミがはいる時は十二の時だつたのでね……尋常小學校の免狀がなければいけないので、仕方なく

よそさまの子供の免狀を借りて、十四のつもりで入れたんですよ。
——それぢやア、ほかの子供の名前ではたらいてゐたわけですね！
私はいさゝか驚いて思はず眼を睜る。
此の堂々たる煙草專賣局の工場で、ごまかしが平氣でとほつてゐるではないか。
短かい休みがすぎると、フミちやんの母の案内で此の工場の一部を見せてもらふことにする。

フミちやんは十六である。今、活動寫眞館の女給となつて、一ヶ月二十圓ばかりの收入で、母と、小さな二人の弟や妹の四人ぐらしの生活を助けてゐる。
紫の女給服を着たフミちやんは、小さな姿に似ずひどく大人びた眼をして私を見つめながら、
——あたしはね、身體を惡くするのがこわくつて、專賣局を止しちやつたの……みんな肺病か、ロクマクになるんですもの！
胸に兩手をあてゝ眉をひそめるやうにして、じつと私を見つめてから、
——それあ空氣が煙草の粉でいつぱいになつてるでせう。かう、かゞんで仕事をするからなほ胸が惡くなつちやふの！
——ぢやア君たちのやうな年でも肺病になるの？……。
——エ、さうなのよ、十七八から、二十ぐらゐがいちばん多いのよ！あたしの友達でもずゐぶん可愛想なひとがゐるの……繼母のためにね、いやなのを無理に工場へ通はせられてね……それですつかり胸がわるくなつちやつたの！……。
——それで病氣になつても專賣局では療治してくれないの？。

私は思はず一生懸命に訊く。

――病氣でやめるとそれまでよ！

フサちやんはあくまでも大人びた眞面目な眼瞬でじつと私をみつめる。

私はなにも言へない暗い氣持になる。今朝見てきた工場のなかゞ眼の前に浮んでくる。と、かたわらからハンテン着の知り合ひの男が不意に顔を出して、

――フサ！てめへなにか、あのイン賣局へ行つてゐたのか？

にや〳〵笑ひながらからかふ。

（イン賣局！　なるほどなア……）おれはなにかしら、深刻な皮肉をきかされたやうな氣がして思はずなるほどなアと呟く。おれのあたまのなかにはシャルル、フイリップの、ビニ、ビユ、ド、モンパルナスの一節が不意に浮んでくる。

『巴里の女工は一日中働きづめに働いて、僅に二法五十仙或は三法しか貰はぬので、それだけでは喰つてゆけぬのはわかりきつてゐる。それだから女工たちは淫賣をするに到るのである』といふ文句がなにかの暗示のやうに……。

次號豫告

次號には千葉龜雄氏の有益な論文を是非掲載したいと努力中であります。その他新進作家、金子洋子氏中條百合子氏にも何か書いていたゞかうと思ひます。どうぞ次號を期待して下さい。

ロンドンの霧

モリス、ウインチェブスキー

嘘らしく聞えるかも知れないが、私はネリーが臨終に迫つた時、あのロンドンの深い霧——英國に殘存するエジプト第九の厄介物の霧——をひどく讃美したといふ事實を證明する事ができる。まあ、諸君は、私の云ふ事に反對せずに、先を讀んでみて納得して下さい。

ネリーはロシャの生れであつた。彼女を生んだ兩親は裕福なユダヤ人で、由緒あるスモレンスク町に住んでゐた。此の町には十六世紀にボリス、ゴドノフが築いた城砦が未だ殘つてゐる。又一八一二年には佛蘭西軍が此の地でバークレー・ド・トリーの率ゆるロシャ軍を擊破して舊都モスコウへ進軍した事があつた。

青い眼をして、金髮の、姿のしなやかな、そして、聲の朗かな、ネリーは家庭の寵兒であつた。從つて又充分の敎育を施されてゐた。

彼女は女學校——ロシャではギムナヂウムといふ變つた名前——に遣られ、六年の後、優等でそこを卒業した。尤も先生や當局の人々は彼女にどこか『叛逆』精神のあるのを好んでゐなかつた。彼女は凜々しい氣象の娘であつた。ロシャの官憲の心にはこうした事が何か大逆罪でも犯す萠しのように映るのであつた。お役所氣質の官憲はその中にレッド、テラーの芽生があるように考へた。

その頃、ネリーは十六歲であつた。女子の高等專門學校は當時はやはり二つの首都、モスコウとペトログラードに在つた。それで彼女はモスコウに行つて、其處で醫學を研究しようと考へた。

彼女の兩親は全くの守舊家といふわけではなかつたが、すべての新しい考、殊に『婦人の獨立熱——ロシ

ャで若い女性の間に大流行であつた――を心から嫌ふ舊式の人間であつた。彼等はネリーのモスコー行きの企てには恐らく反對するところであつたらうが、もう當時二人とも此の世の人ではなかつた。

數年間、ネリーの後見役をして來た處の兄弟の叔父は彼女に反對しなかつた。そこで、彼女は『生れ故郷』を去つて『母なるモスコー』數知れぬ教會、クレムリン、ツアーの鐘、そして何よりもネリーにとつて大切な女子專門學校のある白亞の町、モスコウへ行つた。

學校に入る迄にあらゆる難關を勇敢に切り拔けたので、一八八三年の秋、彼女は入校を許下されて、醫學の課程を修めてもいゝ事になつた。

一時は萬事好都合に運んで行つた。

× × × × × ×

ユダヤ人に對する人民の暴行に相次いで、今度は官憲の迫害がその絶頂に達した。そして此の舊民族にあらゆる困苦を嘗めさせた。

最もひどい迫害の仕打として、官憲は法律の强制執行に依つて、ロシヤ帝國の『内部』に住むユダヤ人の移民を『居住區域』つまり、ロシヤに併合さるゝずつと以前にユダヤ人の住んでゐた西北地方及び其他の二三の州の地に追放した。

ところで官憲のみるところに依つて、ユダヤ人の女は研究の資格はあるが、唯一の研究、場所であるペトログラードとモスコウの何れにも住む權利がないといふ事になつた。

其の結果、ネリーは、此の嫌はれた民族の他の多くの人々と同樣に、退去の通知を受けた。可憐な少女は安然自失してしまつた。

彼女の知つてゐる限りでは此の難關を通りぬける通は、只一つ基督教徒になる事であつた。然し彼女はそうする事を欲しなかつた。

『私は僞善者ではない』彼女は云つた。
それから數日間が經過した。
『私どうしたらい丶でしよう』
彼女はこう叫んだ。其の時彼女は同じ惱みに苦んでゐる一人の友達と此の事に就いて語り合つてゐた。
『ミンニイや私と同じだと思ふわ』友の少女は悲しげに云つた。
『同じとは何の事？』
『黄色の監札を受ける事よ』
『黄色の監札つて！どんなもの？』
『どんなものかつて？……おや、あなた可愛さうな子ね、それはね、あなた、私達が警察で淫賣の届をして黄色の監札を貰ふ事よ、——此處ではねユダヤ人の女でも淫賣なら構はないんですつて。それは……』
思ひ切つて、少し語り出したその可憐な少女は、いま〳〵しいこれ等の言葉を、一語〳〵吐き出すように云つて、やがて其處にうち倒れて、はげしくすゝり泣いた。
ネリーは薔薇色の唇を喰ひしばつて、何かつぶやき乍ら立ち上り、しつかりした足並で出て行つた。
それから二三日經つて、彼女は普通の娼婦として規定通りに屆出を濟した、そして數千の基督教會の神聖な鐘の音の下に自由に住んで、從前通りに何の妨も受けずに研究を進めて行つた。
然し彼女はもう同じ人間ではなかつた。
女と戀とが同じ意味に考へらるゝ一生涯のある時期に、ネリーは憎む事を學んだ。彼女の憎惡心は暗黒な日が相次ぎ、ユダヤ人の迫害がその種類と殘忍の度を増すに從つて、益々つのつて行つた。
それでもネリーは尙、六七ケ月も學校に止つて居た。

× × × × × ×

一八八三年の春にはネリーは戀の對照となつてゐた。此の時彼女に愛を捧げたのは知人の一青年であつた彼女はその愛情に報いる事は殆んどしなかつたが、何よりも友人の必要に迫られてゐたので、喜んで青年の好意を引受けた。

ネリーが、嫌いてないその青年をいつか愛するようになるのは極めて當然な事であるが、彼女の最初のローマンスは莟の中に摘み取られたのであつた。

ある朝の事、郵便配達は彼女に一通の手紙を渡した。それには次のような言葉があつた。

スモレンスクより

いとしい姪よ――

私は今しがた追放の通知を受け取りました。これから三週間以内に、私は廢人として此の町を立ち去つて行くのです。あなたは家へ歸らねばならぬ。勿論、私は喜んで、私が殘して行くものを皆あなたに上げる然し、これから尙あなたが硏究を續けて行く事は目下のところ、到底、望みがない。早々

一八八三年、五月十九日

『家へ歸れつて』彼女は叫んだ。此の年頃のやさしい娘の聲としては殆んど恐いような調子でこの言葉を繰り返した。

やがて最初の驚きは去つた。彼女は心の中で色々な計畫を廻して、とう〳〵一つのもくろみを決めた。

『でも彼女は獨語した』あの人にこれを知らしてはならぬ。もしかするとあの人は私について來るような考を起すかも知れない、私は私に續いて、友達を、渦卷の中に引き入れる權利はない』

其の年の眞夏に、英國の首府の人口は憐れな人間を一人增した。

實は此の若い女性の胸は傷いてゐたのであるが、國勢調査員は人間を調べるのに胸が健かであるかどうかには少しも意を用ひない。

× × × × × ×

ロンドンでネリーは生活を求めようとして數年を費した。彼女は只ぶら〳〵して暮す事が出來なかつた。彼女の持つてゐる知識は皆殆んど何の役にも立たなかつた。筋肉勞働をして何か一通の生活を細々作らやつて行かうとしても出來なかつた。それて彼女の手に依つてうまく行くものは何一つないように思はれた。彼女は、帽子作り、ボタンの穴縫ひ、あらゆる針仕事、葉煙草巻き、又は手紙書き（文字を知らない田舍婦人の爲に）さへもあれやこれやと骨折つて見たが、これ等の職業から得らるゝ金は一週平均、六ミルリングに足らなかつた。そして一方には嘗てみづ〳〵しかつた健康がだん〳〵と破壞されて行つた。やがてネリーの體はひどく惡くなつた。

彼女は働かうにも體が惡く、泥棒をするには正直すぎ、乞食になるには自尊心が強く、借金して一時の助をかる事さへも自尊心が許さなかつた。彼女には飢餓がさし迫つてゐた。

色つやのない眼、痩せた頰、色あせた唇、磨かぬ齒、曲つた膝、彼女の姿は人間化された悲慘の形像のように見えた。

暗陰は急に增して行つた。家賃の滯りは此の上どうにもならない程、たまつた。そして自身、非常に貧乏てあつた。女家主は遂にネリーに立ち退くように云つた。

ネリーはそれを豫期しないではなかつた。彼女は一言の不平も云はずにその家を出た。ロンドンには勞働者救濟所があつた。然しロシャのユダヤ人の女は誰も其處に行かなかつた。

此の外に行く所は何處であらうか？

町の通りと空がある。あゝ、然し、十一月の町通りはさびれはて、空は冷たく何ともたよりない。

一日中、さまよつた、ネリーには夜が襲ふて來た時彼女は人通りの極く少い街の或家の玄關の下に坐つてゐた。

睡眠が彼女への最大の救ひであつた。そして、女が丁度、眠に陥らうとしてゐると、公安維持の嚴しい役人が來て、不意に彼女を起して、そこを立ち去るように云つた。

運命に屈從した彼女は這ふようにして歩いた。

身裝のいゝ一人の若者が傍を過ぎて彼女に一瞥を與えた、そして彼女が醉つてゐるものと決めた。

若者は鋪道の上にいま／＼しい氣持てかつと唾を吐き乍ら、急ぎ足にすぐ闇の中へ消へて行つた。

それから、ネッリーは何度も疲れた手足を休めようとしたが無駄てあつた。そして無慈悲な夜がついに明けはなれた時には女は半死の體であつた。

最後の身の廻りのものを賣つて得た二三ペニーてどうやら次の數日間身心を支えて行く事が出來た。然し寒い、物凄い夜が、ぼんやりとした陰鬱な晝と交代するだけて何の休息もなかつた。

でもとう／＼休息がやつて來た。

或る青白い十一月の夜、ロンドンは深い。暗い、息詰るような霧に包まれた。その町は一番、眼の利く巡査でも街路にある戸口の階段にうづくまつてゐる其の憐れな人が何をしてゐるか見透かす事が出來なかつた。ネッリーは眠つた、親切な、思ひ遣りの多い霧をあつく祝福し乍ら目をつぶつた。次の夜も同じ事が起つた。

『おお、有難い、有難い『霧』彼女は云つた。三日月の夜は一層よかつた。彼女はぐつすりと眠りに入つたそれて物苦しい暗黑が遂に去つた時『當番』の巡査が彼女を起さうとしたがもう駄目であつた。

彼女は死んでゐた。

然しとにかく、一人の道德上の怪物、一人のユダヤの女がロシヤから拭ひ去られたのであつた。

職業婦人社代理部を御利用下さい

代金は引替郵便または前金にて振替口座へお拂込み下さい

洋傘

男物……上等絹張　四圓五十錢以上八圓迄

女物……上等絹張　三圓以上九圓迄

原產地と特約して確實な品を殆ど元價同樣で、お分ちいたします。

地方の方は、年齡と値段とを御知らせ下されば、直ちにお送りいたします。

古本

地方のみなさんのために、安く讀めるやう、古本の御注文に應じます。書籍の名と、著者とを御通知下されば、すぐに御送りします。

新本

パンフレット

などの御取次ぎもいたします。

どしく御注文下さい。

諸印刷

諸印刷物

名刺、領收書、

ビラ、案內狀、

その他なんでも安く早く御注文に應じます。

ハガキを下されば直ちに御伺ひいたします。

職業婦人社
代理部

東京府下巢鴨町一〇一九番地
電話牛込（二四四八番）
振替口座東京（六四一六〇番）

原稿募集

【論　文】十五枚位（四百字詰）
【時事批判】長短隨意
【創　作】二十枚位（同　前）
【感想文】詩歌、其他飜譯など

締切（毎月五日）

宛名は、職業婦人社内

「婦人と勞働」編輯部へ

▲編輯室より▼

○前號の意外な好評に勇氣つけられて、本號からはどうやら期日通りに發行する迄にこぎつけました。

○女敎員大會を前に控へて、發行される本號の爲に、女敎員に對する希望を、特に御寄せ下さつた齋藤、平田、兩氏に深く感謝いたします。

○女敎員大會はこの雜誌が發行される頃開かれます。全國各地から來られる方々を我が社で特に御招きして、お茶でも差上げやうと計畫しましたが、これも經費の都合から不可能になりました。で、たゞ　刷物をみなさんに差上げて覗つてせめてもの御招待代りとすることに致しました。

○紙上からその方々に御挨拶申し上げ　す。

○前號に申したやうな茶話會を、六月中旬にいたします。奥むめお氏を中心として、夏の夕べを御一しよに語り合ひたいと存じます。期日が定り次第御知らせします。どうぞ皆さん！お誘ひ合はせの上御出かけ下さいませ。

○震災後しばらく中止して居りましたこうしたしんみりとした會合も、次第に數多く持つて行けることゝ思ひます。或る意味で私達を育んで行く原動力となる棌希つて居ります。

○大きく目をみはつてこの社會を見渡した時私達はどうにもせずには居られない氣持になります。と同時に自己のあまりの小さゝに恥かしくなります。一方には何處までも自己を見詰め、一方には手をつなぎ合つて一歩づゝ進んで行きませう。

○皆さんの御寄稿を樂しみにしてゐます。雜誌を通してどし〳〵語り合ひたいものです。

○相變らず經費が苦しいので、贊助員を募つてゐます。贊助員は回後毎月一圓以上の宣傳費を負擔すること。

○又同樣な意味で誌代を振替にて御拂込み下さるやう特に御願ひ致します。

○代理部は、各地からの注文で賑つてゐます。品質のよいのと非常に廉いと云ふ事が呼物になつて居ります。どうぞ一度おためし下さいませ。

定價

一部	金三十錢	郵税五厘
半ケ年	金一圓八十錢	不要
一ケ年	金三圓六十錢	不要

廣告料

特等	一頁	四十圓
一等	一頁	三十圓
二等	一頁	二十圓
	半頁	十圓

四回以上割引あり

御注文は總て前金で願ひます。
御送金は振替に御拂込み下さい。
郵券代用の際は一割増の事（五厘切手にて）。
誌代の領收書は別に差上げません
雜誌發送を以つてこれにかへます

大正十三年五月三十日納本　第二卷
大正十三年六月一日發行　第三號

編輯發行兼印刷人　東京市外巣鴨町一〇一九　奥むめお
印刷所　東京市外下澁谷五三三　弘榮社
發行所　東京市外巣鴨町一〇一九　「婦人と勞働」職業婦人社
電話牛込二四四八番
振替東京六四一六〇

露國文壇にして革命家たる
ロープシンの一傑作出づ！

青野季吉譯　神原泰裝畫

定價一圓二十錢
送料十二錢

蒼ざめたる馬

好評六版

原作者は如何なる人ぞ！　ケレンスキー政府の陸相たりし人で、本名はサヴインコフといふ。この小說は世界的に有名な作で、全篇を貫くに獨特の形式を以てし、一人のテロリストを主人公とし、それに戀愛の三角關係を絡ませ、名刀の如き切味と、白金の如き光を有する藝術品につくりあげてゐる。近時の翻譯文學中の驚異といふも過言でない。

黑田乙吉譯　柳瀬正夢裝畫

定價七十錢
送料六錢

黑馬を見たり

印刷中

これは「蒼ざめたる馬」の姉妹篇である。目下巴里に亡命中なる作者が、最近の身邊にまつはる事實を描いたもので、サヴエート政權に反抗せる彼及び其一派が如何に祕謀を廻らし、畫策せるかは、この作品によつて知ることが出來る。併し、單なる一革命小說ではない。前作と同じく、稀有の名文を以て簡潔に描破せる手腕は神技と稱すべきものがある。譯者は多年露西亞に遊びたる新進有爲の士である。

發行所　東京牛込區天神町六　隨筆社　電話牛込三四番　振替東京六六〇七九

婦人と勞働　第二卷第三號
大正十三年五月　日第三種郵便物認可
大正十三年六月一日發行（毎月一回一日發行）
定價金參拾錢
職業婦人社發行